日蓮大聖人御書全集

上野殿御返事（竜門御書）

うえのどのごへんじ

りゅうもんごしょ

新版
1894
〜
1895

上野殿御返事（竜門御書）

弘安2年('79)11月6日　58歳　南条時光

進上　上野殿　あつわらのものの事　日蓮

唐土に竜門と申すたきあり。たかきこと十丈、水の下ることがっぴょうがやをいおとすよりもはやし。このたきにおおくのふなあつまりてのぼらんと申す。ふなと申すいおののぼりぬれば、りゅうとなり候。百に一つ、千に一つ、万に一つ、十年二十年に一つものぼることなし。あ

るいははやきせにかえり、あるいはわし・たか・とび・ふくろうにくらわれ、あるいは十丁のたきの左右に漁人どもつらなりいて、あるいはあみをかけ、あるいはくみとり、あるいはいてとるものもあり。いおのりゆうとなること、かくのごとし。

日本国の武士の中に源平二家と申して、王の門守りの犬二疋候。二家ともに王を守りたてまつること、やまがつが八月十五夜のみねよりいずるをあいするがごとし。てんじょうのなんにょのあそぶをみては、月と星との

速瀬返　鷲鷹鳶　梟食　滝　連居　網　漁　取射取者　魚竜

ひかりをあわせたるを木の上にてさるのあいするがごとし。かかる身にてはあれども、「いかんがして、我らてんじょうのまじわりをなさん」とねがいしほどに、平氏の中に貞盛と申せし者、将門を打ってありしかども、昇でんをゆるされず。その子・正盛またかなわず。その子・忠盛が時、始めて昇でんをゆるさる。その後、清盛・重盛等、てんじょうにあそぶのみならず、月をうみ、日をいだくみとなりにき。仏になるみち、これにおとるべからず。いおの竜門をのぼり、地下の者のてんじょうへまいるがごとし。

光合　猿愛　願交　許殿上　叶殿上　懐身遊産　成道劣魚　登参殿上

身子と申せし人は、仏にならんとて六十劫が間菩薩の行をみてしかども、こらえかねて二乗の道に入りにき。大通結縁の者は三千塵点劫、久遠下種の人の五百塵点劫、生死にしずみし。これらは法華経を行ぜしほどに、第六天の魔王、国主等の身に入って、とこうわずらわせしかば、たいしてすてしゆえに、そこばくの劫に六道にはめぐりしぞかし。かれは人の上とこそみしかども、今は我らがみにかかれり。

願わくは、我が弟子等、大願をおこせ。去年・去々年の

疫病し人々のかずにも入らず、また当時、蒙古
やくびょうにしにんにんのかずにもいらず、またとうじもうこ
責免見
のせめにまぬかるべしともみえず。とにかくに死は一定な
しいちじょう
り。その時のなげきはとうじのごとし。おなじくは、かりに
ときなげきとうじ当時同仮
も法華経のゆえに命をすてよ。つゆを大海にあつらえ、
ほけきょうのゆえにいのちすてよ露たいかい
塵埋思
ちりを大地にうずむとおもえ。法華経の第三に云わく「願わ
だいちうずむおもほけきょうだいさんいねが
くはこの功徳をもって、あまねく一切に及ぼし、我らと
くどくいっさいおよわれ
衆生と、皆共に仏道を成ぜん」云々。恐々謹言。
しゅじょうみなともぶつどうじょううんぬんきょうきょうきんげん
十一月六日
じゅういちがつむいか
日蓮花押
にちれんかおう
上野賢人殿御返事
うえのけんじんどのごへんじ

熱原有難

これは、あつわらのことのありがたさに申す御返事なり。